

小沢氏支える藤井氏

今年1月、新テロ対策特別措置法が再可決された衆院本会議を途中で退席して以来、民主党内での求心力低下が目立ち始めた小沢一郎代表。その小沢氏を引き立てつつ、非小沢グループとの「潤滑油」として、貴重な存在感を発揮しているのが藤井裕久最高顧問だ。

繰り上げで復帰

藤井氏は、「郵政解散」による2005年9月の衆院選で落選の憂き目にあつた。しかし、同党の長浜博行氏の参院選出馬に伴い、07年7月、比例代表南関東ブロックで繰り上げ当選。約2年ぶりに政界に復帰した。

「落選した時は『これは天命。いい区切りだ』と後援会の方に宣言しただけに、いろいろ考えました。でも、繰り上げを辞退するには、死ぬか、除名か、離党しかない。現実的には離党の道もあったけど、党への影響を考えるとそれはできなかった」

当時の心境をこう振り返る藤井氏は「だから、その論理から言えば、次の総選挙は当然やりません。最後の奉公です」と、今期限りでの引退を公言する。

道路、日銀で党内調整

永田町への復帰直後、民主党は参院選で第一党へと躍進した。党税調会長に就任した藤井氏は早速、次期衆院選をにらんで、党の税制改革案づくりに着手。道路財源問題では、「道路族」議員の激しい抵抗に遭ったが、道路特定財源の一般財源化と揮発油(ガソリン)税の暫定税率廃止で党内をまとめた。

「道路特定財源は、国の資源を道路に集中投資するという考え方。でも、導入から54年たって、そういう時代は完全に終わった。ですから、これは命懸けでやる。国の姿の問題ですから」

いずれにしても、これで小沢民主党は、政府・与党を追い詰める強力な「武器」を獲得することになった。道路財源問題をめぐる与野党攻防は、衆参両院議長のあっせんでひとまず収束したが、暫定税率の期限が切れる年度末に再熱するのは必至だ。

一方で、藤井氏が神経をすり減らしているのが、次期日銀総裁人事への対応だ。小沢氏が元財務事務次官の武藤敏郎副総裁の昇格を容認する余地を残しているのに対し、小沢批判を強める仙谷由人元政調会長らは「財金分離」の原則を盾に、「武藤総裁」に反対する考えを明言。党内政局の様相を呈している。

こうした中で、藤井氏は講演などで「日銀は独立性と同時に、通貨価値の安定が非常に大きな仕事だ」と繰り返し、「武藤総裁」への否定的なニュアンスを発信。小沢氏に対して自分の考え方や党内の空気を伝える一方、仙谷氏にも小沢氏が最終判断を下した場合は従うよう説得するなど、党内融和に腐心している。

若手の教育係自認

1993年に小沢氏と自民党を離党し、今なお政治行動を共にしている政治家は藤井氏だけとなった。小沢氏への忠誠競争に励んだ「側近」議員が次々とたもとを分かっていく中で、

適度な間合いを取りながら、小沢氏を支える役割に徹してきた。「自民党と比べれば、民主党はまだ子どもだから」。最近では、党内の若手議員の教育係を自認。政治家としての心構えを説く日々でもある。

名キャッチャー「最後の奉公」に

中学、高校、大学当時は、野球部でキャッチャーとして鳴らした藤井氏。東大では、プロから誘いが掛かったエースピッチャーが弱視だったため、サインも見ずに投じるボールを黙々と捕り続けたという。

「キャッチャー人生10年。やっぱり長い間スポーツに打ち込むと、人生観にまで影響するんですよ」。豪腕・小沢氏をフォローしながら、党内の状況にも目を配る。そんな藤井氏のポジションは、キャッチャーの役どころとも重なる。次の衆院選と、それに続く政局。藤井氏は「観客席」から戦況を見守ることになるが、果たして民主党は小沢代表の下で政権を獲得できているだろうか。